おはようさん

第３号

良くも悪くも大人が築いた文化の中で育つ子どもたちに、私たち大人の生き方が今問われています。
京都の躾を語る女性の会は、躾といういささか古びた言葉を持ち出し、伝統と文化の町―京都において、今も息づく「躾」や「訓」にともに学び、ともに語ることから、真の子育て文化を提唱します。

京都の躾を語る女性の会
〒六一六－〇〇二二　京都市西京区嵐山朝月町六八－八
京都府神社庁内
TELO七五－八六三－六六七七
FAXO七五－八六三－六六六五
http://www.net-k.co.jp/situke
E-mail:situke@net-k.co.jp

～お正月の催し～

伝統行事を見る

去る1月20日、当会第3回目の催しが洛南は城南宮において行われました。今回は、お正月ということもあり、府内の神社を参拝し、併せて神社の伝統行事を拝観することにより、その意味などを知り、私たちが子孫に守り伝えなければならない事柄を発見できれば、との思いからこのような催しが企画されました。

次第

講話１
『産育習俗に学ぶ』
岩屋保育園園長　室田　一樹氏

昼食

講話２
『湯立神楽について』
鷺森神社　宮司　石　治氏
『神功皇后伝承と神社の創生』
城南宮　宮司　鳥羽　禮自氏

湯立神楽参列

神苑拝観

石宮司様の講演
湯立神楽の成り立ちや、その内容について詳しくご説明いただいた。

御神前に奉納される湯立神楽
神職による祭典の後、巫女による鈴の舞の奉納。そしていよいよ湯立神楽が奉納され祭りはクライマックスへ。

当日はとても風が強く寒さが一段と厳しい日でありましたが、大変大勢の方にお集まりいただきました。今回の催しには、先ずはじめに岩屋保育園園長であります岩屋神社禰宜、また当会の事務局員でもある室田一樹氏より、実際に子供を預かる身から体験した子育ての問題について、また後に拝観する湯立神楽の奉仕者である鷺森神社宮司石治氏より湯立神楽の成り立ちや詳細について、またご当地城南宮鳥羽禮自宮司より、当宮御祭神や御神紋などについてそれぞれ興味深いお話を頂きました。また講演の後には御神前で珍しい湯立神楽を拝観し、参加者一同御神楽にて清められた御神湯を体いっぱいに振りかけていただき有り難く一年の無病息災を祈らせていただきました。

また、その後有名な神苑を拝観させていただきました。お庭では宮司様自らご案内いただき、万葉の草草や、お庭で繰り広げられる「曲水の宴」などについて一つ一つ詳しくご説明を頂きました。

料理人の真髄と継承

京都の中でも一際静寂な佇まいの嵯峨の地にお店を構える、精進料理『嵯峨一久（いっきゅう）』さんは、一切作りおきをせず、故に事前に予約のある日以外は暖簾をつらず、また、宣伝活動も全く行わず、あくまで作った料理で勝負するという拘りと信念を持ち、決して営利主義にとらわれず、本物の料理をお客様にご提供されています。今回は、ご主人の津田星一さんと、ご子息の津田達也さんに、『嵯峨一久』に代々受け継がれてきたものや、躾についてお話をお聞きしました。

精進料理とは、よくお寺さん等で召し上がられる料理ですねんけど、うちは特に旬の素材を厳選し、味付けも何も彼もすべて、本物の料理をお出ししますんや。何日も仕込むものや、中には何年も寝かしたものもあります。漬物でも全部自家製ですわ。

また、見た目だけの飾り付けなどに凝るんやなく、全て食べられる材料しか使いませんのや。

料理の技術は代々受け継いだもの。ただし、自分で良いと思う方へ改良してますんや。

静かで趣きのある店構え。普段は暖簾はつられていない。

この店にレシピはおまへん。分量と時間とタイミングがすべてですんや。

こんな時代のこんなや、今の時勢という言葉には抵抗があります。こんなってなんや？時勢って何や？料理というものは美味いか不味いかでっせ。昨日はどうやったとか関係なしに、今が大切やと思てます。

津田 星一（せいいち）さん
昭和１０年生まれ
６４歳

自分の家に伝統があるということは、自分から言うもんやのうて、周りの人が決める事でして、皆様のお蔭で繁栄してます。表へ一歩でれば「皆様のお蔭」という気持ちを、決して忘れてはいけまへん。

今は家庭の躾が悪うおます。学校とは、自分（親）に教える力がないから通わせているんでして、（学校に）文句があるんやったら、自分で一人前に教育すれば良ろしい。教えてもらうとゆうことは、相手を尊敬して、初めて教えてもらうもんですんや。

こういうことはきびしくしないけまへん。右か左かどっちかであり、甘やかしてはあきまへんのや。

例えば、お客様の為にご飯を炊きますやろ。すると、どうしてもご飯が残り、〈冷ご飯〉が沢山できますやろ、私らはそれを食べますんや。小さい頃は息子も、「暖かいご飯が食べたい」と言うてましたが、それは間違いやと教えてきましたんや。お客様が来られてご飯を召し上がる。そやからこそ〈冷ご飯〉ができる。自分らが最初から暖かいご飯を食べてるようではアカンのや、と。

自由を与える前に、締め付けること（義務）をしなくてはいけまへん。それから初めて自由がありますんや。人間として最低の礼儀作法は知っておくべきですなぁ。

職業柄、宗教関係によく出入りさせてもろてました。お寺の老師などから、人間が生きていく為の方法など、本来なら聞けるはずもないもんを、簡単に聞かせてもろうてました。つまり、知らんうちに耳に入ってたわけですなぁ。そういったことを若いうちから経験したというのが、私の宝ですんや。

料理の一品。
金柑・蕨・揚げ麸・独活・湯葉・筍・擬製豆腐。
いずれもその素材の味が際立っている。

※以降　達也さんのお話し

自分は兄妹で男一人でしたが、正直言って親から家を継いでくれとは言われてません。

周囲の人の風当たりもあり、周りの声により、やらなあかんなぁと。こういう家業がある以上、それを継がないというのは謀反みたいなもんですね。

ただ、この家業に惚れ込んで継いだわけではないんですが、どの分野でもそうでしょうが、端から見てるというのは、必ず表面的にしか見えてないもんでして、中身は全然違います。今では奥の深さに引き込まれてますねぇ。

この商売に取り組む姿勢は、口伝では教えきれるものではありません。作っている姿、見た感覚で覚える。けど、親のコピーではあきません。

履物を揃えるなど、最低限の礼儀作法はこの世界では当然のこと。サラリーマンの家庭にはないと思いますが、自分はそういう世界をみて育ちました。それが自然に自分の中に入ってくる。お寺さんなどで住職さんの話を聞いて、門前の小僧・・・ではないですが、知らず知らずのうちに自分の頭の中にも、そういう精神が根付いていました。

決して良い子になるつもりはないんですが、ここまで大きくしてもろて、よくここまでこの仕事を存続させて、ほんまに、よお大きくしてくれたなぁと感謝してます。

津田 達也（たつや）さん
昭和３７年生まれ
３７歳

連載・時事を問うコラム③

「よそいき」

大石神社宮司　進藤　秀保

「今日は京へ行くさかいこれ着いや」と〝よそいき〟なるものを出される。日頃は着るものには無頓着な母親が、アイロンのかかった白いシャツに半ズボン、時には赤い蝶ネクタイまで出してくる。まさしくよそへ行くための特別な服である。山科特有の呼び方なのか、京に連れてもらえるのがうれしくて、嫌嫌ながらこのよそいきを着る。そのとたん日頃の悪ガキが行儀のええ、よいこに大変身をとげるのである。高島屋の大食堂へでも行くものならどこから見てもおぼっちゃまである。このよそいきは、正月、祭、お盆などや来客の時にも登場し、そのつどおぼっちゃまに変身をとげるのである。

今思い返すと、よそいきを着る事により子供なりに日常と違う空気を感じ取り、向かい合う人に対して気配り心づかいを自然に身につけ、社会に順応する上での礼儀、けじめを体験し、季節の節目における目に見えない神、祖先に対しての存在を認識し、礼節をわきまえる精神を育ませるものだったのではないだろうか。しかしながら昨今は欧米文化の影響からか、トレーナーやジーンズなどの仕事着が日常の服装となり、どんな場所においても日常と変わりなく通用する社会となりつつある。変身する機会がなく、日常と社会とのけじめがなくなり、人やものに対しての精神的な緊張感、尊厳が生まれず、自分本意の性格が生まれ、わがままと云われる子供達が増えてしまう結果となるのではないだろうか。

このよそいきこそ改まった場所、晴れの場所に着る晴着である。その目的、季節、空間、いろんな状況の上で身につける着物、そこから生まれる精神性こそ日本人の文化であり、日本人はそんな文化の中から自然に躾が培われてきたはずである。戦後教育の弊害が取り沙汰される今こそ、私たち大人が日本人の中に脈々と受け継がれてきた文化、そこに息づく躾を見直し、次世代の子供達のために努力しなくてはならないことであり、よそいきの文化、日常と違った空間を子供に体験さす機会を多くつくることも一つの試みではないだろうか。

京のなぜ？

京の「おばんざい」とは？

京都では古くから日常の食卓におなじみの「おばんざい」、いわゆるお惣菜である。しかし、なぜ「おばんざい」と呼ぶのか？また、何の日に何を食するという習わしは？

大文字の女将　今井さんにお尋ねしました。

まず語源から。漢字では「番菜」と書き、番茶、番傘等と同じように「番」という字は日常を表わす云われ、晴れの日に対して日々家で食する常のおかず、と云う事です。だからその土地の安くておいしい旬の食材を使って、母の手間ひまのかかった料理が昔より綿々と続いて来たのです。

その土地の食材を使うから、その土地の行事と結び付いた料理も生まれ、毎月決まった日に食する料理には、平均的に栄養を取ると云う知恵まであるのです。

毎月の決まりもんを挙げると、

一日・十五日は
　小豆のご飯とおなます
八の付く日は
　あらめとお揚げのたいたん
末日は
　おからのたいたん

となります。

わざとこだわってみて下さい。気持ちが豊かになると思います。

次回予告

『桂小米朝氏講演会と扇子作り体験会』

日時
平成十二年五月十二日（金）
午後二時～
午後四時三十分頃
※午後一時三十分受付

場所
八坂神社　常磐新殿
（東山区祇園町北側）

会費
（扇子作り参加の方）
お一人様　二千円
（講演会のみ参加の方）
お一人様　一千円

内容
◎講演会　（六〇分）
◎休憩・歓談　（二〇分）
◎扇子作り　（六〇分）

※当日託児室を設けております。お子様とご一緒でも、ぜひご参加ください。

会員の声

間もなく当会発会より一年を迎えます。今回は入会時にお寄せ頂きました皆様のご意見を掲載します。

○未婚で子供もおりませんが、身近に感じたり報道される今の親子関係について悲しみと怒りを感じております。その感情とおりあいをつけるためにも色々学びたいと思っています。
（京都市・公務員）

○京都の躾こそが日本の女性美だと思います。私も、この会に携わる事で自身のマナーや躾、礼儀を見直したいです。マナーや躾が失われているからこそ、せめて自分だけはマナーや躾を大切に守りたいです。
（大阪府・短大生）

○神社に勤めている友人から、このような会があることを聞き、とても興味を持ちました。
京都に住んでいないけれど、日本文化に興味を持ち、古都に対しての深いあこがれもあります。
ぜひ、入会させて頂きたいと思います。
（静岡県・公務員）

○両親より頂いた技術・知識を、現代っ子の子供達に、どのように継承してゆけばよいか悩んでおります。
すばらしい会が出来ましてとても喜んでおります。
（京都市・家業手伝い）

事務局だより

◎事務局が引っ越しました

今まで事務局を置いておりました京都府神社庁が、この度新庁舎建設移転の為、住所変更となります。

新しい新庁舎は、「京都府神社会館」と称し、風光明美な嵐山の地、松尾大社の大鳥居のすぐ側に建てらました。

機会がありましたら、一度お立ちより下さい。

（新住所）
〒六一六―〇〇二二
京都市西京区嵐山朝月町六八・八
ＴＥＬ　〇七五・八六三・六六七七
ＦＡＸ　〇七五・八六三・六六六五

◎ホームページを更新しました

夏以来、ようやくホームページを更新しました。今後は随時更新し、より新しい情報を提供したいと考えております。

ぜひご覧下さい。

◎会員継続調査を実施します

現在当会には二〇〇名を数える会員さんが登録されていますが、催事に一回も参加されていない会員さんもおられます。

遠方という理由もあるかと存じますが、当会の運営資金は関係社や神道政治連盟よりの協賛金により賄っており、財源に限りがあります。

そこで郵券料等経費削減の為、会員継続調査を実施し、名前登録だけの会員さんには退会頂きたく存じます。

何卒ご協力をお願い致します。

朗報

当会提言者　水野　歌夕　氏

第七回 京都現代写真作家展
優秀賞　受賞

此の度、京都府及び京都現代写真作家展実行委員会主催による第七回　京都現代写真作家展において、当会提言者の水野氏が優秀賞を受賞されました。

娘さんの舞夕ちゃんをモデルにした「憧景」と題する作品で、ご出産後最初の展覧会ということもあり、水野氏はこちらまでもが嬉しくなるほどの、大変な喜びようでした。（拍手）

～女子神職の立場から躾について～

私の住まいする所は、自然がいっぱいの心豊かな片田舎です。しかし悲しいかな、今までにはなかったことが起こりました。五年生の長男のクラスは、たったの十名、その中の一人が登校拒否で、学校を休んでおられます。しかし、ある日その子が、我が家に遊びに来てくれました。その夜、長男と話す機会があり、「お友達なのだから、温かく迎えてあげてね、ぼくが守ってあげるからと言う気持ちで接すればいいのよ、それがあなたの友達として、また神職さんになることの始まりですよ。」と話しました。分け隔てなくみんなにぬくもりが伝えられる様に育ってほしいと思いました。

私は、神職の妻として、母としてこれといった躾は特別にしていませんが、しいて言うならば「心優しく、いつも笑顔でね。」と言っているぐらいでしょうか。

京都女子神職会 会員
某神社 禰宜　Ｈ・Ｈ　四〇歳

京都女子神職会とは

京都府神社庁傘下の十の関係団体の一つで、京都府下の神社に奉仕する女子神職及び有資格者を正会員とし、神職家庭の十八歳以上の女子を準会員とする。昭和四十五年一月二十六日に八坂神社常盤殿にて正会員二十一名準会員二十八名で初会し今年、設立三十周年を迎える。本会は会員相互の親睦と研鑽を図り敬神生活の綱領を実践するために各種研修会、見学会の開催や会報の発行をし、神社庁主催の行事へ参加協力をしたり、女子神職と神職家庭のパイプ役を担う。慎みの精神をモットーに大和撫子のような奥ゆかしさを備えつつも、行動力を兼ね備えた会員育成を目指している。

会員数約五十名　（会長＝海部憲子　籠神社権禰宜）

京都の躾を語る女性の会

入会随時受付

お葉書・Ｅメール・お電話などにより、事務局までお申し込み下さい。

本会または本誌に対する、ご意見ご感想をお待ち申し上げます。

現況報告

会員数　一九九名
ホームページアクセス数　三，三七七件
平成十二年四月六日現在